

# 最高のレクイエム

西村 孝次

(協会顧問・元明治大学教授)

もし伝記というものを、ひとつの対象たる逝にし者へのレクイエムの一種、と考えられるとすれば、まさにリチャード・エルマンの『オスカー・ワイルド』こそはワイルドのための最高の鎮魂歌といえるであろう。しかもエルマン自身、これを書きあげた直後、昨年(1998年)の5月13日に69歳をもって歿し、したがって本書は遺著として10月に刊行され、ただちに版を重ねた。

『イェーツ：人と仮面』(1949年)および『ジェイムズ・ジョイス』(訂正新版, 1982年)と並んで、これはエルマンの「アイルランド三部作」をなすものであるのみならず、おそらく、もっともすぐれた終結篇である。『ジョイス』の本文744頁にくらべると、これは554頁で200頁近く少ないが、それでも手にとれずしりと重く、その内容もまたいっそう新鮮で興味深い。

エルマンがここで説こうとしたのは、およそ次の点である。すなわち、1. ワイルドはイギリス文学の原点である。2. かれは文字どおり19世紀人として19世紀の幕を引いたが、それと同時に20世紀の幕を開けたのである。さらにいえば、かれは本質的に20世紀人であり、われわれのひとりなのだ。3. かれはほとんど常に唯美主義者とだけ見られているが、「しかしかれの主題は、しばしば考えられているような、人生(生活)からの藝術の分離(絶縁)ではなく、経験による藝術への避けがたい糾弾(問責)なのだ。かれの作品は必ずといってよいほど仮面を剥ぎとり、真実を暴露することに終わる」(p. xiv)。

『ジョイス』が、序論、第1部ダブリン、第2部ポーラ、ローマ、トリエスト、第3部チューリッヒ、第4部パリ、第5部チューリッヒへ還る、という構造で、章は通して37、それにノートと索引が付き、頁毎に偶数は年代、奇数はそれに該当する年齢を示しており、こうした形式はそのまま本書でもつづけられていて、各章のはじめに作品からの引用文が掲げられてそれがその章の主題を予示する点も同じだが、ただひとつ本書のほうが、いっそう細分化され精密化されている点が違っている。

もっと違っている、いや、もっとも違っているところは、いうまでもなく、ジョイスとワイルドの差である。それは換言すれば両者にたいするエルマンの関係であり距離であり態度である。これらの変化を、まずイェーツ、それからジョイス、そしてワイルドに即してたどることが伝記作者としてのエルマンの微妙な、しかし正確な変貌をあとづけることになるであろう。いずれ、これをわたしは『英語青年』の4、5、6月号で試みてみたいと考えている。